

## 平成 27 年度 第 1 回社会教育委員会議概要

- 1 日 時：平成 27 年 5 月 22 日（金）10:00～12:00
- 2 会 場：小田原市役所 議会全員協議会室
- 3 委 員：木村議長、中村副議長、有賀委員、荻野委員、角田委員、佐久間委員、高橋委員、土田委員、益田委員
- 4 職 員：諸星文化部長、安藤文化部副部長、杉崎文化部副部長、友部生涯学習課長、大島文化財課長、古矢図書館長、川口スポーツ課長、日比谷子ども青少年部長、北村子ども青少年部副部長、石井青少年課長（事務局）  
大木生涯学習担当副課長、高橋生涯学習係長、渡邊主査、田中主事
- 5 傍聴者：なし

### 6 概 要

#### 1. 委嘱状交付

諸星文化部長から荻野委員に委嘱状を交付した。

#### 2. 部長挨拶

諸星文化部長が挨拶をした。

#### 3. 委員紹介及び職員紹介

名簿順に委員に自己紹介していただき、次に職員が資料 1 に沿って機構順に自己紹介した。

#### 4. 報告事項

##### (1) 社会教育事業の結果及び予定について（平成 27 年 2 月～8 月）

資料 2 に沿って、順次各所管の社会教育事業の結果と予定について報告した。

##### (2) 平成 26 年度社会教育事業の結果について

生涯学習課長より資料 3、4 に沿って、平成 26 年度の社会教育事業が、前期答申をどれくらい反映して実施されたかについて報告した。委員からは特に質問は出なかった。

#### 5. 協議事項

##### (1) 附属機関等への委員の推薦について

生涯学習課長より資料 5 に沿って説明をした。

明るい選挙推進協議会常任委員に深野委員を推薦することとなった。

##### (2) 答申について

生涯学習課長より資料 6 から資料 10 に沿って説明をした。

【木村議長】 自治会総連合の会長の立場からの話になるが、小田原市には26の自治会連合会があり、現在21の自治会連合会で「まちづくり委員会」が組織されている。今年度中にすべての自治会連合会で立ち上がる予定で、各地区でまちづくりをするという使命のもとに進めているという現状である。その中でも私が自治会連合会長をしている富水地区では、現在ボランティアや自治会長などを含め、75名の委員が所属している。始めた頃は50名程度だったが、50名が一つのことについて協議をするというのはなかなかまとまらないだろうということから、6つの分科会が作られた。交通の問題、防災・防犯の問題、文化・教育の問題、地域振興の問題、健康と各分科会の活動を周知する広報である。広報分科会は各分科会が行う活動や行事を回って様子を撮影・編集し、地域に周知している。

75名の委員の中には、主婦の方や地域に13ある各団体の役員のほか、富水小学校、報徳小学校、泉中学校と養護学校の教頭先生も入っている。2ヶ月に一度、まちづくりの役員会を開催し、各分科会の活動を報告している。開始当時は私も6つの分科会に全て出席していたので忙しかった。平成24年に地域別計画を策定し、その後、市から富水地区でモデル事業を進めるよう依頼されて、そこから本格的に活動するようになった。画期的だったのは、これまで自治会や地域がやってきたことを小田原市の総合計画の冊子の中に組み入れてもらえたことで、これが地域の皆のやる気につながった。

活動を進める中で、リーダーをどうするかという悩みはあり、初めはあまり深く考えずに、自分の気持ちを伝えながらやっていたのが、現在では、各分科会内でどうするかなどを自分たちで考えるようになった。良かったことは、自治会長や各団体長は2、3年で団体を引退するが、引退後もまちづくり委員会には残るというシステムを作ったことである。体調が悪いかたは仕方ないが、それ以外のかたは団体長をやめてもまちづくりに残るようにしたことから、75名まで増えた。

小中学校や養護学校の先生も輪の中に入っていることも良い点である。地域振興の分科会の活動が、富水の埋もれてしまった文化財や道祖神、神社の由来などのマップとCDを作成した。分科会の人たちが自分たちで撮影してナレーションを付け、せっかく作ったのだからと、それを小中学校に配布して授業での活用を依頼し始めた。最近になり学校の方で校外学習をやろうという話がやっと出始めたところである。

やはり組織の雰囲気固く締めすぎず、適当というか、あまり四角四面でやってしまうと地域のかたとコンタクトが取れないし、社会教育もまちづくりも一緒だと思うので、26の自治会連合会のどこでもそういう形が出来上がっていき、その中に社会教育の人が入るのも面白いと思うし、色々なやり方があると思う。今のは富水地区の1つの例として紹介した。一方で行政（地域政策課職員）も会議に出席するので大変だと思う。今は

私は名前だけで、会議にはほとんど出席していないが、地域の輪は段々と広がっているので、各分科会の中でリーダーを決めてもらっており、こちら側が誰か人を見つけてくるようにとか、これをやるようにと指示をすることは一切ない。そういう形で市長の考えるコミュニティと社会教育がうまく合致すると良い。

お年寄りのお茶会では、タウンセンターいずみを拠点としてやろうとしたが、富水地区は広く、会場から遠い人もいるということで反対意見が出た。そこで各地区の公民館を利用することになったが、お年寄りになるべく外に出てきてもらうため、色々と考え、例えば大正琴などを呼んだりもするようになった。そういうように考えていけばどの地区もできる問題だと思う。こうやらなければいけないとあまり考えすぎるときつくなるが、最終的にはトップが腹をくくればいいというスタンスでやれば、あとは皆が付いてくる。やり方はいくらでもあるが、そういう形で人を育てることや、自治会だけでなく、民生（地区民生委員児童委員協議会）や社協（地区社会福祉協議会）、ボランティア、学校などが1つにまとまらないとできない。たまたま富水地区はそういう形でやっているということで紹介したが、そういうことを踏まえながら、仕掛けを中心に考えていただければと思う。

【中村副議長】 今の富水地区のまちづくりの事例について、「考えすぎず適当にやっている」と言っていたが、考えないでやっているようで、そこにはすごい技があった。私なりに分析すると7つのポイントがあったように思う。まず、1つ目は、地域での取組が総合計画に入ったということで、評価されたということ。評価されるということはモチベーションにつながっていくので、やったことを評価につなげたことは仕掛けの1つである。2つ目は、リーダー（コーディネーター）がいたということ。その人たちをどう養成するかということも、大事な仕掛けである。3つ目は、費用のこと。例えばマップやCD作成の費用はどこから出たのかということもあるので、そういったことを行政的にどう考えるかも仕掛けである。4つ目は、それだけの人を集めるには、どうやって動機付けをしたのかということ。初めは皆忙しい中で集めるのは大変だったと思うが、動機付けの仕組みが仕掛けとして大切である。5つ目は、そういうことも含めて行政が支えていたということ。行政としてどうやって支えるかという仕組みも大切である。6つ目は、拠点となる場があったということ。場がないと人は集まらない。会議等が行われなくても集まれる場所があるということはすごく大事である。7つ目は、大正琴など地域の人材を活用していたということ。地域それぞれに技を持った人がいるわけで、そういう情報を把握している人がいたことはつまりコーディネーターの役割であるし、その人たちの能力を生かせるということは、その人たちにとっても生きがいになる。この7つは今聞いただけでも仕掛けとして重要になってくる気がする。木村議長に

もっと話を聞いていくともっと多くの仕掛けが出てくるのではないかと思う。「地域で適当にやっている」とのことだが、その適当の中に色々な良いものがあって、それをパイロット（モデル）の形にして広げられると良いのではないか。

【木村議長】 お金の問題は些少だが市から少し補助が出た。

【中村副議長】 そういうところが大事になってくる。

【木村議長】 逆にやればやるほどお金が掛かる。だからその辺をちゃんと市のほうで見てもらわないと、結局今は足りない自治会連合会にお金をもらいに来る。仕方がないので少しだったら何とかなると渡している状況だが、それが長期にわたるとダメになってしまうので、ある程度の予算付けをしてほしい。やればやるほどお金が掛かるので、ではやらなかったら良いのかという話になってしまう。やはりその辺はきちんとしてほしい。

【中村副議長】 費用に関しても、行政からある程度予算をもらうのも大切だが、例えば先ほど図書館が本のリサイクルフェアをやっていると仰っていたが、市民の中でもリサイクルなどをしてお金を集めるなど、色々とできることがあると思う。少なくともある程度の費用は必要になってくるということである。

【高橋委員】 富水地区のやり方は、地域の住民が中心になり、あとは学校の教頭先生が入るといった話であったが、例えば民間企業などは入っていたのか。

【木村議長】 民間企業が入ってくるのは防災訓練の時、信用金庫が入っている。今は企業に（地域活動への参加が）位置付けられており、自治会に防災訓練に参加させてほしいと依頼が来る。富水地区には企業があまりなく、商店も減っており、大きな企業というと信用金庫くらいしかない。

また、今まで社協がやっていた夏祭りを去年からはフェスタという形で全体でやることにした。お金がないので、自治会長に歩いて協賛金を集めるように言ったが、なかなか集まらない。仕方がないので自治会連合会からとりあえずという形でいくらか出してもらい、社協にもいくらか出してもらって、1回目（昨年）は何とか開催した。その時は自治会長や社協のかた、民生委員のかたが一生懸命歩いてくれて何とか40万円くらい集まり、それを元にこれから続けていこうかとなった。

今、高橋委員から話があったが、地域の一般のかたもまちづくりの中に入っているが、今のところほとんどは自治会長や民生委員や子ども会の会長など、地域の団体の人が集まっている。一般のかたで写真を撮るのが好きだという情報が来れば、そのかたを広報委員に誘って写真を撮ってもらうなど、引き込むことは引き込んでいるし、お祭りなどには来てくれるが、後片付けなどにはなかなか参加してくれない。しかしそれは仕方ないかなという気もする。

ただ良い取組として、小学校・中学校・養護学校の行事予定を通信（いずみふれあい通信）として全戸配布している。そもそもの始まりは、泉中学校の生徒が平日の午前中に歩いて、地域の人が学校は何をやっている

のかと不思議に思ったというところから生まれたものだが、通信により今日は泉中学校は中間試験で、午後は学校がないからぶらぶらしているんだなということが、地域の方にも分かるということは大切かなと思う。この取組には青少年課から補助金をもらい、2か月に一度配布している。富水には4,000世帯以上あるが、それを自治会が配ってくれている。こういった配布物については自分たちに関わることで、文句は出ない。まちづくりを始める前は、回覧物が多いことに文句が出ていたが、まちづくりをやりだして自分たちも関わるようになると、最終的には自分たちも輪の中に入っているのでは結局文句を言えないし、やらないと皆が見ているので周りの意識がいつの間にか変わった。そういう意味では、市長が進めた地域コミュニティは良いのかなと思う。始めからやる気があったわけではなく、企画政策課から地域別計画を作るように言われた時に最初から総合計画に入れるという話があれば良かったのだが、地域別計画を作ると突然指示が来たので、日頃から忙しいこともあって反発があったが、段々とモデル事業をやりながら分科会形式にしてやり始め、いつの間にか1つの輪になっていった。会議が終われば飲み会をするので飲み会も多いが、その場でも飲んだ勢いで不平不満が出たり、そこから今度はこうやろうという話をしながらやると、段々と皆が上手くまとまってくる。初めからまとめようと思ったら無理かなと思う。

【角田委員】 先ほど木村議長が言われたフェスタは、これまでは社協が主催でやっていたものを、今度からまちづくり委員会がやるようになって、わいわいフェスタという形になった。受け手側は少し驚いたようだったが、まだ1回目であり、2回目からは軌道に乗ってスムーズに受けてやれると思う。ただ、富水地区は大きな企業がなく協賛金をもらえるところがないため、そこは大変である。

また、いずみふれあい通信は助かっている。外で声が聞こえるが、なぜこの時間に子ども達がいるんだらう？という時に通信を見て納得したり、養護学校は今日は遠足に行くんだなと思ったり、学区の中の学校の行事がすべて網羅されているので、参考になり感謝している。とても良いことを進めてくださり頭が下がる。

【中村副議長】 今の話は、資料7の図にあるまちづくり委員会が中心になってやっているわけだが、富水地区の場合はこの中に企業がないけれども、企業もこの中に入れていく必要があると思う。また、仕組みの1つとして広報、つまり情報を伝えることもすごく大事である。また、皆さんの話を伺って思ったのは、どうやって動機付けをしたのかということである。時間がなく会への出席なども嫌だと皆が思う中で、色々な委員会をどうやってまとめていったのか。それぞれ違う立場のかたがたを連携させるのは難しいことだが、恐らくそこが学びである気がする。その辺りのコーディネートはどうしたのかが知りたい。

【木村議長】 それについては、会議の時間を一律に決めるのではなく、各分科会の中で自分たちで決めるようにしているからだと思う。主婦のかたや、働いている人がいると、一律に19時から開始しますというのではなく、分科会ごとに、例えば主婦が多いから16時半から始めて、遅くても18時には終わらせてほしい、というように自分たちの会議の時間を決めている。誰かが、次回は夜飲みたいから19時からにしてほしいと発言すれば、分科会長がその場で「その時間でいかがですか」と皆さんに諮り、賛成多数ならそのまま決まる。既定路線を作らないで分科会ごとに好きな時間、皆さんが合う時間を設定してやっている。

【中村副議長】 それはすごいコーディネーターだと思う。

【木村議長】 男性はやはり飲みたいので、会議の開始時間も18時や19時と設定し、20時半や21時に終わらせて、その後に飲んだりする。こんな感じで自分たちで会議の時間を決めているので、批判もない。文化教育の分科会は学校の先生が入っているが、学校があるので18時頃からやろうと提案して、先生方に大丈夫か聞いたりする。そのほうが会は進めやすいと思う。

【中村副議長】 今の木村議長の話はある意味成功例だが、そう上手くはいかない地域が多いと思うので、上手くいかないところでどのようにすれば上手くいくかを考えることが仕掛けかなと思った。他の地域でこういう所がうまくいっていないとか、どうしたらいいか悩んでいるところなどを出すと、いいのかもしれない。

【土田委員】 豊川地区では、栢沼教育長が単位自治会長だったときに地域別計画を作成したが、この辺りのところは木村議長の富水地区と似ている部分と似ていない部分がある。似ている部分は飲み会があることで、どこで飲みますか？という話から入る団体もあった。地域別計画は豊川地区では9ブロックに分けて作成した。他のブロックのことは批判しないということを当時の自治会長から言われていたが、批判が出たブロックもあった。その理由としては、1つは交通関係なのだが、台風や風で曲がったり曇ったりしたカーブミラーについて小田原警察署が業者にお金を払って修繕を依頼したのだが、交通関係の部会ではそれを手伝うと言いながら、結局は三脚を持って後を付いていただけだった、などの声があった。

また、良いところとしては、先ほど道祖神の話が出たが、豊川地区の道祖神はそのときに全部調査して記録を取ってあるということである。その中には、宅地造成や持ち主の代替わりなどで土地を売ってしまい、今はなくなっているものも幾つかある。地域別計画の作成の際にも問題になったのだが、特にアメリカの美術館にある道祖神は戦後から独立するまでの間に運び出されたものがほとんどであるという話が出て、真実かは分からないがそういう話もあった。

できることからやっていくことが大切で、先ほど富水地区のいずみ通信の話が出たが、豊川地区でも新聞（豊川スクールコミュニティ新聞）を毎月

出している。A4 サイズで詳細までは書いていないが、地区の保育園には豊川地区以外のかたも来ており、非常に助かるという話を聞いている。今は中断しているが、自治会長に再開を望む声があがっている。

【木村議長】 まちづくりや社会教育は自治会長がやるべきではないと思っている。自治会長はただでさえ忙しいのに、さらに仕事を押し付けたら怒るだろうし、最終的にはまちづくりはコミュニティをしっかりとさせないといけない。それについての仕掛けをどうするかが今話し合うべき問題であり、地域の中の問題は地域が解決するべきである。今やっているのは、コミュニティと社会教育は一体であり、そのために仕掛けや人づくり、コーディネーターをどうしていくのか、という形で 1 つの答申に向かっていかないといけない。私は富水地区の話をして 1 つの例として言っただけで、他の地域に行けば様々な問題が出てくると思うので、それは自治会と区別しないとけない。先ほど益田委員が自己紹介の中で「自治会の副会長になったので公民館のことをどうしようかと考えている」と言ったが、そういったことをやっていくのがこれから答申に向かっていくために 1 つ必要なことなので、そういう事を考えながら発言をしていただきたい。

【高橋委員】 先ほど民間の企業がメンバーに入っているかを聞いたのはお金の問題で、協賛金をいただけないかなということで聞いたのと、地域を考えるときには、住民だけでなく、私も含めて小田原市民ではないが小田原に働きに来ている人がいるのであり、私も今こういう場に参加させていただいているので、そういったかたも一緒になって地域について考えられるようになるのが良いのかなと思ったためである。今話を聞いていても地域にそれぞれに課題があるので難しいと思うが、良いことをやっているのはどこの地域も知りたいと思うので、富水地区の良い面、豊川地区の良い面はそれぞれ違うが、それを皆が知っていくと地域づくりをする上でも違うと思うので、それをどこかで知る機会があれば良いと思う。計画などは、地域の意見を聞きながら、どちらかと言えば行政が主体で作ると思うので、そういった中で地域別計画を総合計画に盛り込んだということはすごいことをやったなと率直に驚いた。

また、どう地域を考えるかについてだが、地域のかたが本気で考えていけないとできないのではないかな。誰かにやらされてできたものは楽しくないだろうし続かないと思うので、地域の住民が考えていかないと公民館もそうだし何でもそうだが、どんどん衰退してしまうと思うので、そうならないために誰かがやるのではなく、自分たちがやるという意識付けをどうしていくのが課題なのかなとずっと考えていた。

【木村議長】 今のまちづくりは行政主導ではない。行政はオブザーバー的な立場であり、地域が主体となっている。地域の中で考えて自分たちでやるのでお金を付けてほしい、というような形なので、行政側からまちづくりに対してこれをやるようにという指示は一切ない。本当に地域主体でやっている。

答申などになるとある程度行政にまとめてもらうところがあるが、実際の活動は地域が主導でやっているの、できればお金をたくさん付けていただければ各地域もありがたいと思う。

【中村副議長】 そうやってできる地域もあるが、できない地域もあると思う。今の高橋委員の意見ですごく大事だと思ったことは、働きに来ている人も含めて自分たちでやっていこうという動機付けだと思う。それは資料3の「公共心を養う」という部分にあたり、そこをどうやっていくかがすごく大事だと思うし、どうやるべきかというアイデアがない場合には、共有する場を作ることが大切である。よく色々な地域で連絡協議会を作っているが、それだけでなく、例えばラウンドテーブルのような形で、お互いがやっていることを紹介し合う場があると良いかもしれない。

【土田委員】 豊川地区は、クリーンさかわでも多くの企業の方に参加していただき、ありがたかったが、地域の活性化という点でいうと、祭りを中心にやっており、飯泉、成田、桑原の3つの祭りを同日に実施している。神輿を担ぐ人の確保が大変なので神輿会の人たちの行き来などもある。

また、企業の話では、豊川地区の企業は薬品会社が多く、防災訓練などでは非常に協力的だが、立ち入り禁止の場所が多い。ある会社の薬品部は法定伝染病の病原菌を持っていたり、別の会社では回虫を飼っていたり、またレントゲン写真のフィルムを作っている会社もあるため、協力的だが規制もある。そういう状況の中で今年も防災訓練をやるということで連合自治会長が計画を立てているところである。自治会長と自治会だけが動いているのではなく、育成会も子ども会も母親クラブも入ってやっている。

また、何度も言うようだが、広域避難所の広報を小田原市でもう少し徹底してほしい。小学校は広域避難所に指定されているが、中学校は支援部隊の駐屯地なので避難所ではないということを、豊川地区の単位自治会の役員のなかでも理解していないかたがいるので、もう少し広報してもらえるとありがたい。

【中村副議長】 今の発言の中で示唆に富むのは、祭りを中心にやっているということで、資料3の「郷土愛を育てる」とからめて仕組みを考えられると良いのかなと思った。また、企業がたくさんあるという地域の特性を生かしていけると良いかなと思う。

【益田委員】 先ほど中村副議長が話の中で、リーダーがいることが大切であると言われたが、私の地域はリーダーがいなかったためにまちづくりが進んでいない。地域別計画の作成の際も2回の会議で終了してしまい全然進まなかったの、やはりリーダーの存在はすごく大切で、やろうという人がいないとダメだと思う。私の地域では自治会が動かなかったため、昨年度から今年度にかけて社協が少しずつ動き始め、高齢者宅のゴミ出しの手伝いなどができるかたがやる、という活動が始まったところである。それも講演会等に出た人を地域に引っ張りあげて、その人と社協の役員とで委員会を立ち

上げて始めたものである。まちづくり委員会となるとどうしても各団体の代表にもれなく付いてくるので、代表になった人はまたそういうのに参加するのか、となってしまう。それよりも講演会等に参加するなど意識の高そうな人を見つけるということが人材の把握という意味で大切だと思う。もしかしたらリーダーになってくれるかもしれない、という人の情報を把握することが大切である。隣に住んでいる人を知らないというのではなく、自治会等の加入率が下がっていることも、地域として住民を把握できないことにつながるので、啓発していかないといけないのかなと思った。また、地区公民館や分館の老朽化も問題で、私の単位自治会の地区公民館は自治会長の独断で使わせないという回覧を回してしまい、困っている。公民館が使えなくなったら活動の場所がなくなってしまう、どうしようという状況になるので、他の地域も危ないながらも使っている状況のようだが、老朽化している公民館には耐震の費用などテコ入れをしてもらえるとありがたい。

【中村副議長】 公民館は老朽化しているが建替えなどは難しいと思うので、そうすると他の施設を使わなければいけなくなる。また、社協との連携もしていることを考えると、社会教育を教育委員会系だけで閉じ込めるのではなく、福祉や色々な分野をつなげていくような仕組みを作ることと、リーダーの養成が必要である。リーダーも一般的には新しい人を作ろうとするところが多いが、それはなかなか上手くいかないもので、意識の高そうな人やもともといる中から、どうコーディネーターを養成するかが大切なかもしれない。

【佐久間委員】 今日久しぶりに出席させていただき、仕掛けというものを研修や講演会、セミナーをやる時のアイデア出しとからめて考えてみたのだが、社会教育事業の報告を聞いて、「子どもをからめる・無償・職をからめる」ことが良いのではと思った。例えば市民を組織化することと、社会教育で関係しそうな団体、塾、学校、スポーツ教室、後継者がいない産業やさまざまな企業などをからめた組織化が必要かなと思った。また、まちづくり委員に子どもや大学生なども入れても良いのではないかな。例えば、まちづくり委員出席ナンバー〇番、というように参加市民に番号をつけるなど、楽しそうな雰囲気を作り、集めるための仕掛けもありかなと思う。また、まちづくり委員で社会教育サミットのようなことを、アイデア出しの段階から始めても面白いと思う。それが進んできたら、そのうちブースを作り、そのブースで老人会や地域の産業などに携わる団体や企業がこういうことをやっていると紹介する。主催者側はブースの流れを把握するだけで、中の動きは各ブースに任せ、お金もブースに出してもらい、そういう事業を企画をすると、小田原市について、もう少し知ることができるのではないかなと考えていた。

私は企業の立場なのだが、もっと知ってもらいたいと思っている小田原の様々な企業やボランティア団体や現場の人たちがいると思うので、それを

知ることも社会教育や生涯学習だと思う。実際の現場や、こんな仕事があるということを知ってもらうという内容で、サミットの次はそんな活動ができるかなと考えていた。

また、キャリア教育についても考えているところがあり、先ほど後継者問題の話もあったが、将来こういう職業に就きたいということについても、すでに学校でそれぞれやっていると思うが、もっとまちの中にも色々な職業があるということを知ることができるような、仕事を知ろう体験会のようなことをやっても面白いのかなと思う。例えば美容師がヘアアレンジを教えたり、自転車屋が修理の方法を教えたりなど、一堂に会した職業体験会があると、子ども達も楽しみながらイメージが沸くと思うし、体験会には親も一緒に来ると思うので、楽しく学べる場ができるのではないかな。

また、子どもがいなくても地域貢献や社会貢献に興味がある人に対しては、資料 7 のまちづくり委員会の構成団体の活動を体験したり報告を聞く場を設けることで、メンバーを募集できたりするのではないだろうか。最終的に、出席者と参加者と企業団体のメリットを考えた仕掛けを考えていく必要があると思う。

**【中村副議長】** 話を聞いていてすごく楽しそうだった。1つのキーワードは楽しめるような仕掛けを作る、ということで、それが人を集める意味でもモチベーションを上げることにつながるので大切かなと思った。また、大人だけでなく子どもも含むことも世代をつなぐという生涯学習的にはすごく大切なことである。

サミットの話では、地域ごとにやることも大切だが、地域ごとにやることを小田原市としてつなげていく、それはつまり構造化しているわけで、その構造化していく仕組みがもしかして市としてやるべきことかもしれない。話を聞いていてすごく楽しかった。そういう感じに皆が思ってもらえるような仕掛けができるといい。

**【角田委員】** 富水地区は小田原市の中でも非常に大きな自治会連合会で16の単位自治会があるが、やはり段々と高齢化しているので、先ほどのお茶会にしても、その他の企画にしても、参加者を巻き込むことが難しくなっている。木村議長に自治会連合会長としてをお願いをしたいのだが、富水地区には三世代交流の事業がないのではと思うので三世代交流事業をやってもらえるとありがたい。

**【中村副議長】** 高齢化は本当に問題である。三世代交流もそうだが、資料3の「次世代を育成する」とからめて考える必要があるのかなと思った。ただ、巻き込んでいくことについては、すごく回っているように見えるところでも、お年寄りが率先してやってくれていると良いが、悪い言い方をすると牛耳っていて若い人が入れないということもあり、その辺りをどうやっていくかが問題だと思う。

**【角田委員】** 若い人は若い人の団体内で回っており、高齢者は高齢者の団体内で回って

いるが、その団体間の交流がないのが現状である。

【木村議長】 先日、地区体育振興会と老人会長と私とで話をして、三世代交流事業として11月頃にペタンク大会をやろうという話が出た。健民祭は高齢者が増加する中で競技種目がほとんど昔と変わらないので、参加者が減っている。そうすると、ある地区では健民祭をやめてフェスティバルという形でやっているところもあり、これからは高齢者のことを考えるようにと体育振興会に言っているが、なかなか上手くいかない。角田委員が言われたように三世代交流がないこともあり、今年の秋に富水小学校で、チームに必ず子どもと高齢者を入れ、さらにできれば若い人を入れるという簡単なルールで一度ペタンク大会をやってみようと思ったところである。報徳マラソンが今年からなくなったのでその代わりも兼ねてやる予定である。

【中村副議長】 新しく何かをやる際には、上手くいくときといかないときがあると思うが、それを振り返ることが大切である。それ(振り返り)が学習になるし、それを他の地域に共有してもらえると他の地域の示唆にもなる気がする。それが学びなのではないか。

【木村議長】 私は初めからこうあるべき、というやり方は嫌いなので、あまり考えずにとりあえずやってみている。まちづくりもそうだが、皆が出した意見は潰すことはせず、私が責任を取るからやってみようと言っている。やってみて批判があったらそこでまた考える。やる前から色々と言い出したらまともまらないので、富水地区では委員の発言したことは全部やり、やってみてから変えるというスタイルである。

【中村副議長】 それはつまりコーディネーターだと思う。

【荻野委員】 今日初めて会議に参加させていただいたので、今日の話はまだ頭の中で整理がついておらず的外れな意見になるかもしれないが感想ということで。そもそも社会教育、生涯学習とは何か、両者の違いは何かを考えていた。生涯学習は自らの実際生活に即する文化的生活を送るために自ら学習意欲を高める活動、つまり個の活動であり、社会教育法の中にも書いてあるが、それを手助けするのが国や地方公共団体であるということ。また社会教育は、なかなかつかめないが、生涯学習を助けるために地方公共団体等が主導し、就学年齢ではないかたがたに対し、欲求を満たすために行う教育なのかなと理解した。そう考えたときに小田原市として、生涯学習を奨励し、また社会教育を行いながら市民の力を高めていき、それをさらにまちづくりに生かしていくような構想かなと考えた。そこを今回の会議では、生涯学習の個の部分にどうアプローチしていくのか、そこから市としてその辺りの要求をどう満たしていくのか、それをさらにまちづくりにどう生かしていくのか、という中で、そのまちづくりというのが生涯学習・社会教育にあたるのかと考えていた。まちづくりに参加するかはやはり自ら地域のことを考えて様々な学習をしていると考えると、それが生涯学習なのかなと思うが、市民の意識をそこまでどう高めていくかという仕掛け

を考えていかなければいけないと思う。この問題は非常に難しい問題であり、学校現場でも、子ども達の学習意欲をどう高めるかが永遠の課題だが、様々な価値観や思想や心情を持つ一般のかたがたを、どう市や地域のための活動に向けるかということを考えるという難しい会議だと思った。

【中村副議長】 非常に大事なことをお話しいただいたと思う。生涯学習はまちづくりには直結しない。しかし、結果的にまちづくりにつながっていくと良いということである。では、社会教育と生涯学習は何が違うかということ、本質的には生涯学習は理念規定である。また生涯学習社会を目指していくために実施規定として社会教育があり、社会教育は教育であるので仕掛けであるが、それを市としてどうやっていくのか。その中で一番大切なのは、学校教育も社会教育も学習意欲をいかに高めていくかということであり、また社会教育と学校教育の大きな違いは、社会教育はリアルな体験ができるということなので、その辺りをどうしていくかも大事にしていく必要があると思った。

この会議は、社会教育委員会議なので、生涯学習社会を目指して、政策としてどういう仕組みを考えていくのかが必要だと思う。社会教育を行わなくても学習をしているかたというよりも、地域にあまり出てこなかったり、生涯学習の機会に恵まれなかったり、地域の中につながりが全くなかったり、あるいは高齢化していて地域のリーダーがいないなど、そういうところを社会教育の立場からどうつなげていくのかという仕組みを考えられると良いのではないか。

【有賀委員】 地域の中で子どもを育てることに関すること、ということで、前回は会議の中で少し話をさせていただいたが、今回は「酒匂小学校における放課後子ども教室と放課後児童クラブの違いについて」という資料を用意した。放課後子ども教室の趣旨は、安心安全な子どもの居場所を設け、地域のかたがたの参画を得て、学習や体験活動などを行うもので、全ての児童を対象としている。実施形態としては、火・水・木の週3日で行い、実施時間は終業時刻によるが、最終は午後4時までとなっており、それ以降は放課後児童クラブへ移動する子どももいると考えられる。費用については無料で、保険料だけがかかり、おやつも特に出ない。指導員などのスタッフについては、児童の安全な活動を見守る安全管理員が1名、学習をサポートする学習アドバイザーが3名、学習プログラムの作成や学校、関係機関との連絡調整をするコーディネーターが1名で、これは私がやらせていただくことになっている。あとはボランティアがたくさん必要になってくるが、現在、酒匂小学校には朝の励みタイムにプリントのまる付けをするボランティアがいるので、この方たちに声を掛けて一緒にやっていただくということで取り組んでいく予定である。6月16日から始まり、本日午後に保護者向けの説明会があるので私が出席する予定である。放課後の子どもたちが地域のかたの協力を得ながら安心して過ごせる居場所づくり

に向けて、共に学び合いながら取り組んでいきたいと考えている。

また、放課後子ども教室と並行して、今年度からモデル校を設置して始めた取組の1つに、コミュニティスクール制度の導入が挙げられる。コミュニティスクールとは、保護者や地域住民が学校運営に参画する学校運営協議会の置かれた学校のことである。協議会は、学校運営に地域住民の声を反映させるための協議の場となり、コミュニティスクール制度の導入により、学校と地域社会、家庭との実質的な連携が可能になる。現在も学校評議員制度はあるが、それよりも地域のかたがたに学校運営に参画してもらえないものではないかと考えている。学校がこれから地域の中核として近づくための第一歩となる取組だと思うので、事例を紹介させていただいた。

【中村副議長】 放課後子ども教室と放課後児童クラブは教育と福祉の違いがあり、東京都の場合にはそれを連携してやっているが、小田原市の場合もそうか。

【有賀委員】 放課後子ども教室は片浦小学校が1校目で今年で4年目になるが、それに続いて酒匂小学校が2校目である。放課後児童クラブは片浦小学校をのぞいた市内の小学校にあり、今年度酒匂小学校に放課後子ども教室ができたことで、放課後児童クラブとの連携も視野に入れているが、具体的な動きはまだ見られない。

【中村副議長】 行政の枠や行政から下りてくるお金を超えるような仕組みをコーディネートする際にも、社会教育の視点が必要かもしれない。コーディネーターのコーディネーターという役割が社会教育主事に言われているが、それは地域のコーディネートをするだけでなく、行政の中でもコーディネートをしていくことが必要だということである。また、学校コーディネーターやスクールボランティアコーディネーターなど色々な名前のコーディネーターが地域にたくさんいるが、色々な人がいるからこそセーフティーネットになるともいえるが、考え方によっては色々な人が連携していかないと力が分散してもったいないという気がする。それをどうやってつなげるかと言えば、お互い違う立場でやっているわけなので、協力するためにはやはり学びが必要であり、それが社会教育が担うべきところかなと思う。福祉は福祉がやる、教育は教育がやるという別々でやるやりかたは、今の時代にもったいないと思うので、それをどこが中心にやるかと考えるのはすごく重要である。佐久間委員が組織化と言っていたが、それも組織化になっていくのかなという気がした。

【木村議長】 一通り皆さんの率直な意見を聞かせていただいた。本日はここまでとさせていただきたいが、他に言い足りないことはあるか。無いようでしたら、その他について事務局からお願いしたい。

【事務局】 2点連絡させていただく。1点目は、先日、資料と一緒に平成27年度神奈川県社会教育委員連絡協議会総会の出席依頼を送付させていただいた。事務局への回答期限は6月5日になっているので、未回答のかたは期限までに回答をお願いしたい。欠席の場合は委任状が必要となるので、併せ

てお願いしたい。2点目は、次回の社会教育委員会議についてだが、8月を予定している。委員の皆さまには日程が決まり次第、通知を送らせていただく。

- 【生涯学習課長】 色々なご意見をいただき、本日の会議内容をもとに事務局の方で答申の骨子を文章化したいと考えており、次回の会議では答申を文章として見える形で示したいと考えているので、次の会議もよろしくお願いしたい。
- 【中村副議長】 答申文を作るときに、ぜひ資料3と関連付けていただきたい。そうすると議論が深まっていく気がする。
- 【木村議長】 それでは本日の社会教育委員会議はこれをもって閉会とさせていただきます。